

## 柿岡地磁気観測所構内の歴史的建造物について As to the landmark architectures in the Kakioka Magnetic Observatory

西村 公宏<sup>1\*</sup>

NISHIMURA, Kimihiro<sup>1\*</sup>

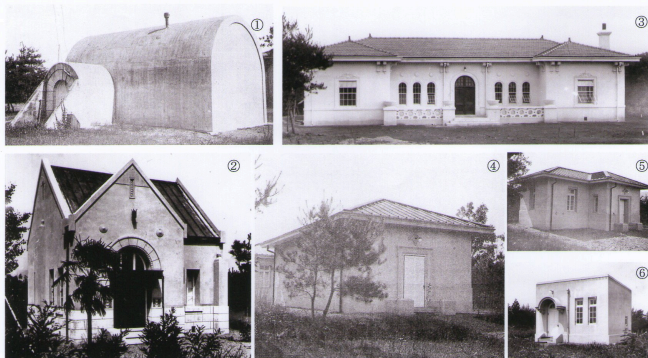
<sup>1</sup> 茨城県土木部都市局都市計画課

<sup>1</sup>City Planning Division, Ibaraki Prefectural Government

柿岡地磁気観測所には、6棟の歴史的建造物が現存している。1912年12月竣工の磁力変化計室(32m<sup>2</sup>)は、非磁性の花崗岩できており、上に土が盛られている。それまでの磁力計室は、温度の変化を避けるために、地下室になっていたが、柿岡の自記磁力計室は、土を被せることにより、平屋建を実現している。土圧に耐えるため、屋根はアーチになっており、また、部屋を細かく区切ることにより、温度変化をさらに軽減している。これらの工夫はデンマークのリードスーコフ地磁気観測所の影響が窺われる。1924年5月には、実験室(38m<sup>2</sup>)が竣工している。この建物は平屋建で、屋根は銅板葺、厚さ0.5mの壁は非磁性レンガを積んでおり、正面にはユーゲントシュティル風の装飾が施されている。1925年8月には、新しい建物が4棟竣工している。庁舎(215m<sup>2</sup>)は、鉄筋コンクリート造平屋建の建物で、事務室、図書室、時計室、地震計室等が設けられている。赤瓦葺の屋根、明るい色の外壁、アーチの窓や出入口、ベランダ等は、スパニッシュの意匠で、窓枠や軒には、やや古典的な飾りが見られる。これらは、当時のアメリカで流行っていた建築様式で、日本の庁舎では珍しいものである。また、新しい磁力変化計室(47m<sup>2</sup>)及び絶対観測室(33m<sup>2</sup>)は、屋根は銅板葺、壁は非磁性レンガの平屋建である。前者は温度変化を抑えるために、壁の厚さは1mもあり、後者のそれは0.5mである。さらに、空中電気室(33m<sup>2</sup>)は、鉄筋コンクリート造平屋建の建物で、一部、スパニッシュの意匠が見られる。なお、庁舎等の設計は文部省囑託の佐藤貞次郎が担当した。このように、柿岡地磁気観測所の歴史的建造物は、磁力観測という用途あるいは当時の建築様式の影響を強く受けており、周囲の風光と調和しつつ、独特の景観を形成している。

キーワード: 地磁気観測所, 柿岡, 非磁性, 厚い壁, スパニッシュ

Keywords: Magnetic Observatory, Kakioka, Nonmagnetic, Thick wall, Spanish



柿岡地磁気観測所構内の歴史的建造物

① 磁力変化計室 ② 実験室 ③ 庁舎 ④ 新磁力変化計室 ⑤ 新絶対観測室 ⑥ 空中電気室